お元気ですか

認知症の早期発見

由岐病院内科　本　田　壮　一

【著者略歴】
本田壮一（ほんだ そういち）
由岐病院院長・阿部診療所所長（兼任）
昭和 33 年 7 月、美波町田井の生まれ。富岡西高、徳島大学医学部卒業。徳島大学病院内科、関連病院勤務後、平成 17 年 4 月より、現職。

「認知（にんち）症」ついて解説します。この病気は、「脳の障害により、いったん発達した知的能力（記憶、判断、ものごとの実行や会話などの能力）が長く障害され、社会生活に支障をきたすようになった状態」と定義されます。人口の超高齢化により、認知症の患者さんの数が増えています。たとえば、病院や施設で、認知症のための徘徊（はいかい）で、入院患者さんが、知らぬ間に自宅へ帰ったり、転倒してけがをしたりして、スタッフが大あわてになることを見聞きするようになりました。

また、認知症のなかには治るものがあることが分かっており、そのために早期発見に努めることが重要になります。小説や映画などの影響もあり、「若年（じゃくねん）性アルツハイマー病」に関心が高まっています。文末に示しましたが、これらの小説や映画を観ると、病気の症状などを理解しやすいと思います。

認知症の主症状は、記憶の障害です。加齢（かれい）に伴う物忘れは、思い出しづらいということはあっても、時間をかければ思い出すことのできるものです。しかしながら、認知症による物忘れでは、物忘れをしていること自体も忘れてしまうため、人から物忘れを指摘されたりすると怒ったり、逆に不安が高まったりします。そうした状態が続けば、次第に他人が信じられなくなったり、自分に対する自信が持てなくなり、ますます人嫌いになり、ふさぎ込んだりするようになります。また、「怒りっぽかった人がなんだか最近丸くなった」などの変化が、加齢による自然なものと思われたりしますが、こうした変化も認知症の初期段階という可能性もあります。

70％をしめるアルツハイマー型認知症を予防するのに、残念ながら確実な方法はなく、高齢者では、繰り返しますが、認知症の早期発見が重要です。早期に薬を始めると、症状の改善や進行を遅らせることができます。認知症患者さんの家族が最初に気づいた症状を表にまとめました。

表：家族が最初に気づいた症状（多い順に）

○同じことを何回も言ったり、聞いたりする
○物の名前が出てこなくなった
○置き忘れや、しまい忘れが目立つ
○以前はあった関心や興味が失われた
○日課をしなくなった
○だらしなくなった
○時間や場所の感覚が不確かになった
○財布を盗まれたと言う
○ささいなことで怒りっぽくなった

「おかしい」と思ったら、年齢のせいと考えて放置するのではなく、できるだけ早い時期に、近くの病院に相談に行きましょう。「おかしい」と気づいてから病院に相談するまでに、約 7 割の家族が 2 年以上かかっているとの報告があります。

参考：認知症の理解が深まる小説・映画の例

1）有吉佐和子著、「恍惚の人」、新潮社（昭和47年）
2）韓国映画、「私の頭の中の消しゴム」（平成16年）
3）映画、「明日の記憶」（平成18年）
4）映画、「殯（もがり）の森」（平成19年）

ご意見・ご感想を歓迎します。

〈由岐病院　FAX：0884(78)0533〉